様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４３３０１６９

研究課題名（和文）コミュニティによる災害文化の実践的可能性に関する環境社会学的研究

研究課題名（英文）Studies on the disaster culture of local community and its practical potential for coping with natural disasters: Research project from the viewpoint of environmental sociology

研究代表者
古川　彰（FURUKAWA, Akira）

関西学院大学・社会学部・教授

研究者番号：９０１９９４２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,900,000円

研究成果の概要（和文）：「小さな共同体」がつくりあげてきた災害に対処する潜在力を、災害経験の文化化（災害文化の生成）としてとらえ、共同体が経験し対処してきた破局的状況に着目して、「災害」に対する共同体の柔軟で重層的な叡知のもつ実践的可能性の検討を目的とした。その重層的なメカニズムを具体的に解明するため、これまで蓄積してきたフィールドデータを読み替え、あらたに収集したデータとともに利用可能なデータベースとして一部蓄積した。

研究成果の概要（英文）：Regarding the practical potential of ‘small-local community’ that enables the recovery from natural disasters as ‘culture of experiencing disaster’, this study aims to explore the practical potential of multiple and flexible knowledge created by community in coping with potential risk of natural disasters. To clarify the multiple mechanism of ‘culture of experiencing disaster, we reinterpreted the data that were collected in our field research and added new ones so that we can establish an usable database for further research.

研究分野：社会科学

キーワード：小さな共同体　災害文化　ローカルな知　河川（流域）　生活史

１．研究開始当初の背景

３１１の大震災以降、災害と安全に対する社会的関心は飛躍的に増大している。こうした思潮のなかで、被災した共同体の再建や共同体の紐帯の再評価についても多くの議論がうまれている。

本研究は、こうした議論や検討の基礎となる災害に対処する「共同体の潜在力」に関して根源的に再検討をくわえるとともに、潜在力が創造する実践的な可能性を探究することで、これまでの災害に関する社会学的研究に実践的な視座を提供する必要があった。

代表者等は、現代世界を席巻する近代的開発主義や経済合理主義と、対極の立場でそれを批判する自然環境主義の双方を斥けるなかで、「小さな共同体」の生活世界の保全を第一義とする「生活環境主義」を提唱した。この方法的視点にたって、現代社会における環境破壊に対して共同体の環境保全力に着目しその発現メカニズムを解明する研究が、1980 年代以降、代表者等によって数多く蓄積されてきた。

「小さな共同体」が創造してきた、災害に対するこの全体的日常的対応力を、代表者は、災害文化と捉えてきたが、こうした発想については、2002 年以降、集中的に研究を蓄積してきた。

まず 2002-4 年には、小さな共同体の知の実践性を確認し分析する作業に着手した。

2005-7 年の研究では、小さな共同体がもつ災害の記憶と地域創成の可能性を検討した。

2009-11 年の研究は、小さな共同体の災害の記憶の(災害) 文化化とその実践性を具体的に検討することで、小さな共同体が編み上げてきた災害の記憶は、共同体内のさまざまな要因と融合されることで災害文化として形を与えられ、今この世界を生きる人々に対して慣習的な災害予防／対処／復興実践を可能にしているメカニズムを解明した。

本研究はこの一連の研究の継承であり、バージョンアップでもある。

２．研究の目的

現代社会は、世界を標準化しようとする強力な力と、それに対抗するローカル化の多様な力との相互作用によって特徴づけられる。代表者等は、1980 年代以降、この相互作用を「小さなコミュニティ」のイニシアティブという視点から読み解き、それが蓄積し運用してきた知識や実践に今後の社会の在り方の可能性を見出そうとしてきた。

「生活環境主義」と代表者等が名付けたこの方法を通して、現代社会の環境保全のために新たな実践的視点を確立してきたのである。

本研究は、その蓄積を基礎として「小さな共同体」が経験し対処してきた破局的状況に着目して、社会を襲った「災害」に対する共同体の柔軟で重層的な叡知のもつ実践的可能性を探究し、「小さな共同体」がつくりあげてきた災害に対処する潜在力を、災害経験の文化化（災害文化の生成）としてとらえ、その重層的なメカニズムを具体的に解明しすることを目的としている。

本研究が解明しようとするのは具体的には、以下の 3 点である。第一には災害の記憶と文化（慣習）化の過程であり、第二には、慣習の実践性であり、第三に接合メカニズムである。

第一の課題は、小さな共同体の知の生成過程に着目して、災害の経験が共同体の成員によって記憶化され、日常生活に埋め込まれることで慣習的実践と結びつくことを、災害経験の災害文化化ととらえてその過程を具体的に記述する作業である。

一例をあげるならば、滋賀県湖西地方知内地区で 250 年近く書き続けられている「村の日記」における水害に関する全記述の分析を通して、その被害内容の言い伝えや警句が、21 世紀の今日どのような形で変形され継承され再編成されているかを明らかにする。

第二の課題は、文化化された慣習的行為が、災害に対する予防／対処／復興の営みに対して実践的役割を担っている過程を定式化する作業である。

具体的には、先の知内の例でいうと、江戸期に起こった湖水水害によって家財を喪失し甚大な被害を受けた人びとを救済するための村の資源（知内の場合は知内川の簗漁業権）の優先分配が、文化慣習化し、昭和期にいたるまで村主導の社会福祉（生活保護）施策としての「貧民稼ぎ」として実践的に機能してきた。その制度とそれに関わる人びとの意識の変容過程を実証的に分析し定式化するといった作業である。

第三の課題については、第二の課題で述べた実践のなかで今日確認される二つのベクトル（「むら」的連帯と地球市民的連携）を接合するメカニズムを解明するものである。

３．研究の方法

本研究は、代表者等（古川、鳥越、松田）が長期にわたってかかわってきた琵琶湖北西岸のコミュニティで 260 年以上にわたって連綿と書き綴られてきた「村の日記」およびその膨大な関連史料を共通のプラットホームにして、それぞれのメンバーが長期に関わってきたそれぞれのフィールド（小さな共同体）における災害文化の生成と運用についての実証的な研究を進めていく。個々の研究を関連づけるために、以下の 4 つの共通の方法論的枠組みに準拠する。

①「小さな共同体」の生活世界への依拠。

小さな共同体が経験してきた外部からの拘束や共同体自身の自律的対処の経験が本研究の基点である。

②歴史軸の導入。

災害が生起した瞬間やその時代のみに焦点をあてるのではなく、共同体が生きてきた歴史的経験をとりいれる。そのタイムスパン

は、現在の共同体のなかで口承や文書などで記憶化されている期間を想定する。
③生活環境主義的枠組。
本研究は、生活世界システムの保全を最優先として、自然と社会を再編成していく小さな共同体のイニシアティブに着目するからである。
④実践的接合性の重視。
小さな共同体が生成してきた災害文化のなかに埋め込まれ、今日機能している二つのベクトル（むら的連帯の再生と地球市民的連携の導入）がいかに接合し、それが現実の実践のなかでどのような作用をしているのかについて具体的に検証する。
各フィールドの災害文化生成のプロセスは異なるが、その根底には、共同体による災害文化化実践（予防・対処・記憶・継承）が共通にみられることが確認できているため、その過程分析をとおして、災害文化生成の一般モデルを構築する。

４．研究成果
「小さな共同体」がつくりあげてきた災害に対処する潜在力を、災害経験の文化化（災害文化の生成）としてとらえ、共同体が経験し対処してきた破局的状況に着目して、「災害」に対する共同体の柔軟で重層的な叡知のもつ実践的可能性を検討した。
その重層的なメカニズムを具体的に解明するため、これまで蓄積してきたフィールドデータを読み替え、あらたに収集したデータとともに利用可能なデータベースとして一部蓄積した。
具体的には、これまで日本だけでなく世界でもほとんど蓄積のない、災害現象に生活環境主義の立場からアプローチし、時間をかけながら災害現象を「災害文化」に変換させていく共同体の潜在力に着目し、それらを分析することを通して、災害を予防し対処し（被害者を）援護し、記憶（継承）する共同体の知恵と実践の動態的システムを明らかにした。
これまでの災害研究は、災害に対する予防、メカニズム解明、緊急対処および社会復興に力点が置かれて少なからぬ成果をあげてきた。本研究は、こうした災害研究とは異質な、小さな共同体の災害文化の研究である。それは小さな共同体が、これまで経験してきた災害を記憶し、それを文化化することで日常世界のなかに対応力を築き上げてきた過程を記述し分析した。
こうした生活環境主義の発想は、環境問題の現場における経済合理主義的思考にもとづく施策と、開発を拒絶し自然保護を至高のものとするイデオロギーの双方を「近代技術主義」「自然環境主義」として批判するところに成立したものだった。この二つの立場は、一見、対立するようにみえながらも、生活世界に埋め込まれた総体としての「当事者性」と「総合性」を欠いており、近代統治システムに固有な「専門化」と「脱文脈性」の罠に取り込まれている点で同根であった。
これに対して、生活環境主義の基本的な視座は、災害現象を捉える生活の論理を歴史文化的にかつ生活者の立場から総体として射程にいれる点であり、共同体が長年にわたって蓄積してきた「災害文化」として把握できる点にある。そこでは川や水辺にかかわる「恵み」も「災い」もともに自らの生活論理の中に位置づけられているのである。
しかしこうした主張は、小さな共同体を自閉的な小宇宙としてロマン化して捉えることではない。たしかに 311 震災の後、コミュニティの紐帯や連帯が注目され評価されることがある。このような主張はコミュニティの紐帯を閉鎖的で万能のものとしてロマンティックに想像する罠に陥りがちである。本研究は、こうしたロマン化を批判して、今日の小さな共同体が備えている接合力に焦点をあてそのメカニズムを解明する。
小さな共同体のなかでは二つのベクトルが接合されている。それは、一つは、「伝統的」「固有」とみなされてきた紐帯を再編成しようとするベクトルであり、もう一つは、共同体外部からやってくる、行政（国家や自治体）、ボランティア、あるいはときには海外からの支援ＮＧＯといった市民的連帯のベクトルである。今日の小さな共同体は、この「むら」的連帯と「地球」市民的連携のなかで、災害文化を生成していることが明らかになった。
本研究では、小さな共同体が実践しているこの現代的接合を明らかにすることで、グローバル化時代の「むら」の可能性を示し、災害へのあらたな、しかし、既に潜在力としてある対応のあり方を提示した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計１０件）

①古川彰・バジュラチャリャ・アムリット、「「穴」の来歴−ネパールにおける道ばたの文化誌」、生活文化史 67 号、3−20、2015 年．査読：有．
②鬼頭秀一、「福島の「被害」、今後の復興に対して、「学」の役割は何か」『学術の動向』第 19 巻 6 号、77-81、2014 年．査読：無．
③菅豊、「文化遺産時代の民俗学―「間違った二元論（mistaken dichotomy）」を乗り越える」、日本民俗学 279、33-41、2014 年．査読：有．
④Matsuda, M., The Difficulties and Potentials of Anthropological Practice in a Globalized World, *Japanese Review of Cultural Anthropology*, vol.14, 1-29, 2014.査読：有．
⑤菅豊 、「現代的コモンズに内在する排除性の問題」、大原社会問題研究所雑誌 655、19-32、2013 年．査読：有．
⑥土屋雄一郎、「震災がれきの広域処理をめ

ぐって」、住民と自治、13-05、18-21、2013年.査読：無.
⑦古川彰 、「矢作川環境誌としての枝下用水史」、矢作川研究、１８号、5-10、2013年.査読：無.
⑧Torigoe, H. (second author), Why do Victims of the Tsunami Return to the Coast? ,*International Journal of Japanese Sociology,* No. 21, 21-29, 2012. 査読:有.
⑨菅豊、「民俗学の悲劇―アカデミック民俗学の世界史的展望から―」、東洋文化 93、東京大学東洋文化研究所、3-53、2012 年.査読：無.
⑩ Fujimura, M（ほか 2 名）, Changes in socioeconomic status, community health and environmental conditions of fishermen by transmigration (transmigrasi) in Lampung Timur, Indonesia, *Life Science Journal 9(4),* 789-798, 2012. 査読:有.

〔学会発表〕（計１５件）
①菅豊、日本文化のトランスナショナリズム—グローバル化時代における文化研究のひとつの方法—、タイ国日本研究国際シンポジウム 2014、チュラーロンコーン大学（タイ王国・バンコク市）、2014.8.26、招待講演.
② Matsuda, M., Where we are headed: Publication of Japanese Society of Cultural Anthropology, International Union of Anthropological and Ethnological Sciences Inter-Congress, International Conference Hall of Makuhari Messe, Chiba, Japan, 2014.5.15-18.
③藤村美穂、山村生業の現代的展開と農的自然、“農的自然”の可能性–生業、観光、食と農、西日本社会学会、西南学院大学・福岡県、2014 年 5 月 11 日.
④古川彰、知が生まれる場所、地域資源マネジメント系プロジェクトＳｈＤフォーラム、兵庫県立大学、コウノトリの郷公園・兵庫県、2014 年 3 月 7 日.
⑤土屋雄一郎、誰に負を引き受けさせるのか–震災廃棄物の広域処理をめぐる「地元」区の対応を事例に–、環境社会学会第 48 回大会、名古屋市立大学・愛知県、2013 年 12 月 14 日.
⑥Torigoe, H., Communities in the Second Stage of Modernization (Water Usage in a Postmodern Community), International Symposium on Environmental Sociology in East Asia, 河海大学（中国・南京市）, 2013.11.2.
⑦管豊、中国の無形文化遺産から学ぶために、日本民俗学会第 65 回年会国際シンポジウム「無形文化遺産政策のホットスポット・中国–中国民俗学の経験から学ぶ–」日本民俗学会、新潟大学・新潟県、2013 年 10 月 13 日.
⑧鳥越皓之、会長講演・東日本大震災以降の社会学的実践の模索――家・ムラ論をふまえてのコモンズ論から、日本社会学会第 86 回大会、慶応大学・東京都、2013 年 10 月 12 日.
⑨古川彰、「穴」の来歴、日本生活文化史学会、日本大学・東京都、2013 年 9 月 14 日.
⑩Miyauchi, T., Common property systems and resilience following disasters: case study of tsunami-hit villages in Kitakami area of Miyagi, Japan, ESA (European Sociological Association), University of Torino, Torino, Italy, 2013.8.30.
⑪鳥越皓之、「東日本大震災と人間科学」シンポジュウム、早稲田大学人間総合研究センター、早稲田大学・東京都、2013 年 3 月 13 日.
⑫松田素二、アフリカから多文化・多民族共生の技法を学ぶ－地域研究の醍醐味、日本学術会議公開シンポジウム『地域研究の「粋」を味わう』、日本学術会議講堂・東京都、2012 年 12 月 9 日、招待講演.
⑬Suga, Y., Into the Bullring: The Significance of Empathy, American Folklore Society 2012 Annual Meeting, New Orleans, Louisiana, USA, 2012.10.27.
⑭松田素二、現代世界における人類学的実践の困難と可能性、日本文化人類学会第 46 回研究大会、広島大学・広島県、2012 年 6 月 23-24 日、招待講演.
⑮Miyauchi, T., Common property systems and resilience following disasters:Case study of fishing villages in the Jusanhama area of Miyagi, Japan.,18th International Symposium on Society and Resource Management 、University of Alberta, Edmonton, Alberta, Canada, 2012.6.19.

〔図書〕（計１５件）
①古川彰、『地域の発展と産業』河合明宣編（「環境保全と地域社会–環境社会学」を執筆）、放送大学教育振興会（改訂版）、総頁 283（83–99）、2015 年 3 月.
②鬼頭秀一、『科学・技術と社会倫理–その統合的思考を探る』山脇直司編（「科学技術の不確実性とその倫理・社会問題」を執筆）、東京大学出版会、総頁 311（257-297）、2015 年 1 月.
③宮内泰介、『公害・環境研究のパイオニアたち—公害研究委員会の 50 年—』宮本憲一・淡路剛久編（「宇井純　反公害の科学と運動の実践者」を執筆）、岩波書店、総頁 233（152-166）、2014 年 9 月.
④菅豊、『エコロジーとコモンズ―環境ガバナンスと地域自立の思想―』三俣学編（「ガバナンス時代のコモンズ論―社会的弱者を包括する社会制度の構築―」を執筆）、晃洋書房、総頁 276（233-252）、2014 年 5 月.
⑤鳥越皓之、『琉球国の滅亡とハワイ移民』、吉川弘文館、総頁 187、2013 年 11 月.
⑥宮内泰介・藤林泰 、共著『かつお節と日本人』、岩波書店、総頁 240、2013 年 10 月.
⑦松田素二・鄭根植、共編著『コリアンディアスポラと東アジア社会』、京都大学学術出

版会、総頁 316、2013 年 8 月.
⑧鳥越皓之、編著『環境の日本史５ 自然利用と破壊』、吉川弘文館、総頁 292 2013 年 6 月.
⑨古川彰、監修『枝下用水 120 年史資料集（その２）』、豊田土地改良区、総頁 124、2013 年 5 月.
⑩菅豊、『「新しい野の学問」の時代へ–知識生産と社会実践をつなぐために–』、岩波書店、総頁 260、2013 年 5 月.
⑪松田素二、『身体化の人類学』菅原和孝編（「暴動を予防する身体–ナイロビにおける 2007-2008 選挙後暴力の事例から–」を分担執筆）、世界思想社、総頁 464（397-419）、2013 年 4 月.
⑫宮内泰介、編著『なぜ環境保全はうまくいかないのか—現場から考える「順応的ガバナンス」の可能性』宮内泰介編、新泉社、総頁 331、2013 年 2 月.
⑬菅豊・岩本通弥・中村淳共編著『民俗学の可能性を拓く』、青弓社、総頁 269、2012 年 11 月.
⑭菅豊、『持続可能な福祉社会へ：公共性の視座から 第 4 巻アジア・中東—共同体・環境・現代の貧困』柳澤悠・栗田禎子編（「日本のコモンズ—生活の安全保障の視点から—」を分担執筆）、総頁 292（13-35）、2012 年 7 月.
⑮古川彰、『地域・生活・国家（21 世紀への挑戦）』水島司、和田清美編（「開発と環境」を分担執筆）、日本経済評論社、総頁 250（151-184）、2012 年 6 月.

６．研究組織
(1)研究代表者
古川 彰（FURUKAWA,Akira）
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：90199422

(2)研究分担者
鳥越 皓之（TORIGOE,Hiroyuki）
早稲田大学・人間関係学部・教授
研究者番号：80097873

鬼頭 秀一（KITOH,Shuichi）
星槎大学・共生科学部・教授
研究者番号：40169892

松田 素二（MATSUDA,Motoji）
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号：50173852

宮内 泰介（MIYAUCHI,Taisuke）
北海道大学・文学研究科・教授
研究者番号：50222328

菅 豊（SUGA,Yutaka）
東京大学・東洋文化研究所・教授
研究者番号：90235846

藤村 美穂（FUJIMURA,Miho）
佐賀大学・農学部・准教授
研究者番号：60301355

土屋 雄一郎（TSUCHIYA,Yuichiro）
京都教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：70434909